HUE RISE
北海道教育大学　へき地・小規模校教育研究センター（a.k.a. 通称：へき研センター）
Hokkaido University of Education Research Institute for Remote and Small School Education
令和 3年 1月 8日発行　第83号　新春号

謹賀新年
今年もよろしくお願い申し上げます

へきけんニュース

ホームページ　http://www.hokkyodai.ac.jp/edu_center_remoteplace/
メールアドレス　kus-hekiken@j.hokkyodai.ac.jp
☎ 0154-44-3291　FAX 0154-44-3292

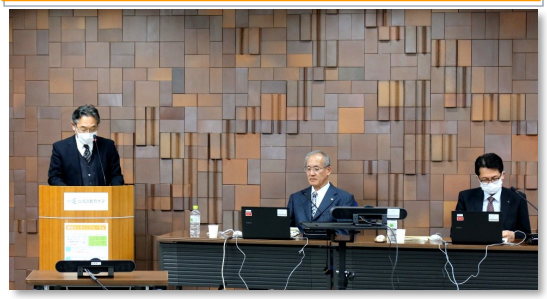
令和２年１２月１７日連続開催第２部　第１８回 へき地教育推進フォーラム
「日本の未来の教育を創造するへき地・小規模校教育の可能性」
報告・討論の要点とこれからの可能性

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター長
玉井　康之（北海道教育大学副学長）

令和2年12月17日に北海道教育大学で開催された第18回へき地教育推進フォーラムのシンポジウム（203名参加）　では、4人のパネリストにより、未来に向けたエネルギッシュな問題提起が行われました。各報告者のレジュメはそれぞれ数十頁に及び、報告資料を合体するだけでも百数十頁にもなります（フォーラム資料を受信した方は分かると思いますが）。それらの報告内容を全て網羅することは、至難です。そのため今回は司会者である玉井康之が、報告内容と討論で大事であると思われた点を要約的・箇条書き的に抽出することにしました。各報告者からすると膨大な報告の一部しか抽出できていないことへの至らなさも感じると思いますが、司会者のまとめとしてご容赦願いたいと思います。

4人の報告者のいずれの報告も「日本の未来の教育を創造する」上で、貴重な問題提起と可能性を提案して頂いたと思います。すなわちへき地・小規模校教育が、次代の先進的な教育活動のパイオニアになる可能性も指摘して頂きました。4人の報告者には、この場を借りて改めて御礼申し上げます。

へき地教育推進フォーラム会場の様子



第18回 へき地教育推進フォーラム　シンポジウム
日本の未来の教育を創造するへき地・小規模校教育の可能性

◆「地域と密着し過疎地域の未来を先導する北海道のふるさと教育の可能性」

パネリスト 池 野 敦 氏 (北海道教育委員会 総務政策局長)

◆「個に応じた少人数学習と主体的な学習を先導するへき地・小規模校の教育」

パネリスト 渥 美 伸 彦・水 上 丈 実　(北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター員)

◆「自律的な学習活動を先導するへき地・複式授業の理念と方法」

パネリスト 伏 木 久 始 氏 (信州大学 学術研究院教育学系教授)

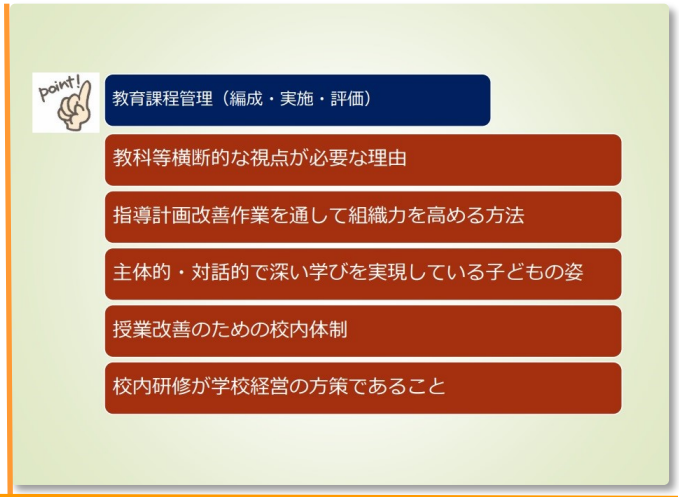
北海道教育委員会総務政策局長　池 野　敦 氏
「地域と密着し過疎地域の未来を先導する北海道のふるさと教育の可能性」

北海道教育委員会
総務政策局長 池野 敦 氏

① あらゆる教育改革が進められているが、少人数の価値が見直され、政策的には小規模校化・少人数指導がトレンドになっている。
② 今は、へき地・小規模校の良さをこれまで以上に高めることができる。そのため、社会に開かれた教育課程の実践や地域コミュニティの教育の創出など、地域と一緒に教育課程を考えていくことができる。
③ 北海道の開拓では士族移民から始まったが、その後個人移住が多く入った。当時は地域住民が浄財を出して学校を建設し、学校は地域コミュニティの中心であった。
④ 地域とともにある学校を目指す上で、歴史的な意味を今こそ振り返ってみる必要がある。開拓以来、学校の運動会は、地域のお祭りであった。学校教員は、地域から歓迎されていた。
⑤ 北海道内では石狩管内だけは転入増であるが、他の管内は転出増である。そして179市町村のうち、町村内に小中学校が各1校の自治体は45町村もある。複式学級を持つ学校の割合は、34%もある。これ以上、学校を減らせない状況に来ている。このことを踏まえて、小規模校の対策をとる必要がある。

池野 敦氏による講演の様子

⑥ 地域コミュニティの中心として求められてきた役割と、次代に求められる新しい学校教育改革の両立が必要である。
⑦ 教育課程改革と地域教育との関連性を模索した、新しい学校マネジメント改革の課題を模索していく必要がある。教科横断的な内容、主体的対話的で深い学び、授業改善のための教育課程の改革と校内体制、校内研修等の教育経営の改革を、地域と一緒に進めていく必要がある。
⑧ 子供が現実との関わりで考え、コミュニケーションをとる教育活動が重要であり、また自律的に活動ができるようにすることが重要である。そのような新たな活動と教育目標を、保護者に分かるように説明できることが必要である。
⑨ 保護者のニーズは必ずしも学校のニーズと同じではなく、学校の目標と地域の願いのベクトルを重ねて、地域協同活動・コミュニティスクールにしていく必要がある。地域と一緒に活動するだけでなく、具体的に教育課程の目標を深めて地域に理解してもらい一致させていく必要がある。
⑩ 現在北海道教育大学と共同して「草の根教育実習（へき地実習）」を進めているが、過疎地域の教育委員会からは歓迎されている。
⑪ 道教委と北教大は、学校間の遠隔合同授業や遠隔研修を進めているが、これの開発は重要な取り組みとして位置づけている。



池野 敦氏の講演資料

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター員　渥 美　伸 彦 准教授

「個に応じた少人数学習と主体的な学習を先導するへき地・小規模校の教育― へき地・小規模校の支援に関する実践報告」

北海道教育大学へき地・小規模校教育
研究センター員　渥 美　伸 彦

① 上川へき地・複式教育研究連盟と一緒になり、大学のへき地・小規模校教育研究センターの予算を活用して巡回指導を実施した。へき地校は教職員も少ないため、外部との連携による研修を広げることが不可欠である。

②「自分の考えや思いを伝え合うことのできる子供の育成」の学校実践研究においても、子供たちが使う言葉と、それに対応した内容知・方法知等の先生方が考える学習用語の活用方法等を提示していく。

③ 子供が言葉をどの場面でどのように使えば良いか、実感を持って理解できるように「知識の行為化」を進めた。そのために必要な言語知識の系統化を進めている。

④ 言語力一覧の中から、最低限教えるべきものを系統化して整理し、次の学年に渡すことが、学年間の系統化にとって重要である。

⑤「話すこと、聞くこと」の学習指導において、話し合いの人数が少ないへき地校では、学年別指導を基本としながらも、異学年の話し合いに参加する方法を重視している。

⑥ 話し合い活動は重要であるが、文字と違って、音声は即時的に消えてしまうことが課題である。そのため話し合いの可視化とふり返りが重要になる。

⑦ 話し合いを「可視化」し「ふり返り」をするために、話し合ったことを文字化すると話し合い全体を俯瞰できる。一方で文字化作業に時間はかかるが、少人数のへき地校は、可視化の作業もやりやすいというメリットがある。

⑧ ふり返りの中での話し合いのコツとして、「確かめ」「聞き返し」「アイデア」「反論」「理由の説明」「もどし」などを観点として、自分たちの話し合いの良さや改善すべき点を考える。これらの観点を踏まえたふり返りにより、自分の思いを豊かに伝え合う子供の育成に結びつく。

⑨ へき地複式教育研究大会の事前検討会の方法として、学生達が児童役で参加する模擬授業方式を取り入れた。これにより学生は複式指導方法を学ぶと共に、公開研究会では子供の実態のあり方を考えることの重要性を実感するようになった。また学校では、授業研究をしやすくなり、大学と学校現場のWin-Winの関係で教育研究活動ができた。

⑩ 話し合い活動では、極小規模校では、架空のクラスメートの設定や話し合いの質を高める三角ロジック（論理的思考の基礎となる考え方）などの話し合いの質を高める活動を紹介した。

渥美 伸彦氏の講演資料

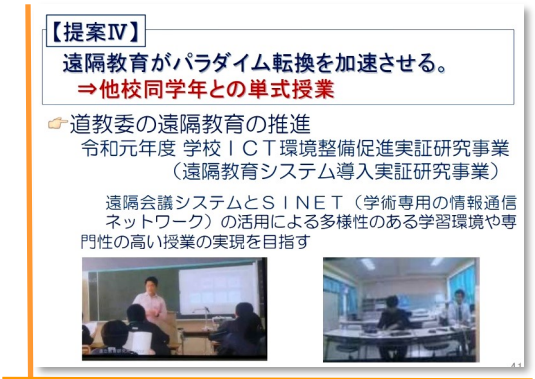
⑪ へき地・小規模校への支援は、校内研修の訪問支援等で充実してきたが、個人としての取り組みではなく組織的な取り組みにしていく必要がある。

北海道教育大学へき地・小規模校教育研究センター員 水 上　丈 実 教授

「個に応じた少人数学習と主体的な学習を先導するへき地・小規模校の教育 ― 学校訪問を通しての授業改善案の提案」

北海道教育大学へき地・小規模校
教育研究センター員 水上 丈実

① へき地校では様々な実践に取り組んでおり、それらの新しい方法を挑戦しやすいのがへき地・小規模校の良さでもある。
②「発展的に考えることを支援するモデルプレート」（発展的考え方の観点）を活用し、子供の発展的な思考方法を促すことで、主体的に考えることができる。
③ 対話的な学びでは、何を対話するか交流の目的を明確にして対話させる。
④ 主体的対話的で深い学びに向けた様々な理論として、「問題解決学習」「発見学習」「プロジェクトメソッド」「自己調整学習」「有意味学習」「協調学習」「逆向き授業設計論」「パフォーマンス評価」「反転学習」等があり、それらの理論を学校現場に提供していくことが重要である。
⑤ 道徳も資料分析に留まらず、子供が自分の答えを見つける時間として位置づけ、それに添った具体的手立てをどうするかの教材を考案していく。それを授業づくりシートにまとめ、考えて行動につなげることを推進しているへき地校もある。これらの新たな授業づくりでは、へき地・小規模校は改善に向けた行動に移すことが早いことがメリットである。
⑥ 教師の共通行動として、板書による見通しとふり返りで、子供が学びの意味に気づくことを重視しているへき地校もあった。生徒の考えを記入する模造紙板書を全学年で取り組み、それを教室に掲示することで学びのふり返りができるようにしている。
⑦【へき地・小規模校の特性を生かした学力向上・授業改善案の提案1】一人一人の児童生徒が見えるからこそ、コンピテンシー・ベースの教育への転換はへき地校が率先垂範して行うことができる。新しい資質・能力の育成に向けた指導観・授業観・評価観とカリキュラムマネジメントの一体的改革を進めることができる。
⑧【へき地・小規模校の特性を生かした学力向上・授業改善案の提案2】授業は学校で行うだけでなく、授業→宿題・家庭学習→授業という、学校と家庭の連続性を作ることで、学習の主体者としてのアクティブ・ラーナーを育成できる。反転授業や“教えて考えさせる授業”に、学校と家庭の授業の連続性を作るヒントがある。
⑨【へき地・小規模校の特性を生かした学力向上・授業改善案の提案3】学年別指導という教師にとってのハードルの高さを払拭して、大胆な発想で学年別指導の改善を行うことが重要である。1単位時間内の直接指導・間接指導という発想ではなく、1単位ごとの直接指導・間接指導という発想も必要である。そのためには子供が取り組む課題が直ぐ解決する簡単なものではなく、いわゆるパフォーマンス課題を設定し、児童・生徒が見方・考え方を働かせながら見通しをもって分析し概念形成を図るようにする。概念化を図る単元レベルでの深い学びにしていくことで、課題を事実的知識から説明的知識へ、そして概念的知識に高めていく。



水上 丈実 氏の講演資料

⑩【へき地・小規模校の特性を生かした学力向上・授業改善案の提案4】遠隔教育が小規模の限界を超え、パラダイム転換を加速させることができる。免外教員の授業を克服するために遠隔教育を活用したり、学校間の子供の意見を取り入れる交流授業等によって、へき地・小規模校の授業を変えていくことができる。学校規模や距離に関係なく教育活動を行うことができるようになるので、へき地教育を確実に変えることになる。

信州大学学術研究院教育学系 伏 木 久 始 教授

「自律的な学習活動を先導するへき地・複式授業の理念と方法」

信州大学学術研究院教育学系
教授 伏木 久始 氏

① 少人数の弱みを克服する挑戦として、少人数の課題を捉えるというよりも、少人数だからこそできることを追究することが重要である。
② ICT・テレビ会議システムを使えば、他校・異校種・学校以外と結ぶことができる。
③ 従来の “教える” “扱う” という発想を見直し、子供一人一人の発想や課題に向き合い、つまずきに教師が付き合っていくことが重要である。少人数であれば、これらを進められる。
④ 少人数では子供一人一人に目が届くので、つい丁寧に教え込んでしまう。また、固定的になってしまう学級内の子供の役割を変えていく指導をしないままで済ませてしまうことに注意する必要がある。少人数の中での適切な対処をしないで、学力格差や人間関係の固定化を少人数のせいにしがちである。
⑤ 学習者の試行錯誤や失敗を含めた経験が重要であるが、つい教師が教え込む傾向がある。自律的な学びを育てるためには、「きめ細やかに」「丁寧に」「分かる授業」は大事なことであるが、やり過ぎると、学びの主体性を弱める指導になる。手をかけるほど自分で勉強できなくなるという悪循環に陥る。
⑦ 異学年混合学級方式は多様な他者との学び合いを保障するもので、異質な者・弱者を排除する意識を抑制し、社会性を育成できる。人と違うことが当たり前であることが、一人一人の自律的な学びを尊重する基盤となる。
⑧ 小規模にならざるを得ない状況だからこそ、自律的な学びに変えていく必要がある。与えられた学習課題に従って学ぶだけでなく、自分なりに学び続ける機会を学校の中で与えていくことが重要である。
⑨ 学校では他律的に学び家庭で自律的に学ぶというのではなく、学校では他律的かつ自律的に学び、家庭でも自律的に学ぶことが重要である。
⑩ 家庭学習も嫌々宿題等をやらされるというだけではなく、家庭でも自分で選択的に自律的に学ぶことが重要である。自律的に学べるようにするためには、個々の子供によって支援する内容も変わってくる。
⑪「個別最適な学び」と「個別指導」は、イコールではない。子供が学習課題・内容に応じて、学び方を自分なりに考えて選択してトライすることが大事である。
⑫「個別最適な学び」と一斉指導を適切に関連させ、集団思考にどの子も参加させ、一斉学習の質を高めるために個別最適な学びを活用する。そのために、授業時間内に個別の「一人学び」を保障することと、家庭学習の課題として位置づけた反転学習などを活用することが重要である。
⑬ AIの個別学習システムがどんどん出て来るが、それにすべて委ねるというよりは、多様性の配慮ができ、その子供なりの試行錯誤を大事にする学びを尊重することが重要である。

伏木 久始 氏の講演資料

⑭「個別最適な学び」をするための「単元内自由進度学習」は、共同空間での自律的な学びを促進するもので、教師にはそのための個別学習シートの準備をして頂く。子供同士は孤立ではなく、共同空間での自律的な学びを進めていく。
⑮「個別最適な学び」をするための「無学年制自由選択式ドリル」は、まず学びの机・空間を講義式形態ではなく、自由な環境スペース空間に変え、それぞれの子供にとって集中できる多様な空間を作っていく。その上で自分がトライできる教科・教科書の中身を選択していく。100種類以上の無学年制自由選択式ドリルを、自分でとれるように用意しておく。

⑯ その子の選択を優先することで、自律的な学習能力を養成する。理解度に応じて学年指定枠に関係なく取り組める。無学年制にすることで子供の劣等感を助長させない。答え合わせも自分でする。
⑰ 子供が「学習の手引き」を見て自分で計画を立てていくが、先生が教え込む時間よりも早い時間で終わっていく。そのため発展問題を用意しておく。子供は発展問題もやりたいので、一生懸命やろうとする。
⑱「無学年制自由選択式ドリル」学習では、子供どうしが学年を越えて教え合う姿も見られる。

伏木 久始 氏の講演資料

⑲「無学年制自由選択式ドリル」による「個別最適な学び」では、1年生から6年生までの異学年混合の複式授業なども実践でき、子供のつまずきと質問で教師がサポートする。
⑳ 同じ題材でも、目標を変えながら異学年複式で進めることもできる。
㉑ 日本初のイエナプランスクールでは、あえて複式で学習する形態を採用している。
㉒ 次世代型教育のフロンティアとしての小規模校は、教職員の意識改革がしやすく、授業改善もしやすい。そして多様な授業形態にトライしやすい。
㉓ 複式学級は、同じ尺度で比較評価しなくなり、子供の論理に応じた授業が実現しやすい。そして子どもどうしが多様性を受けいれるようになる。

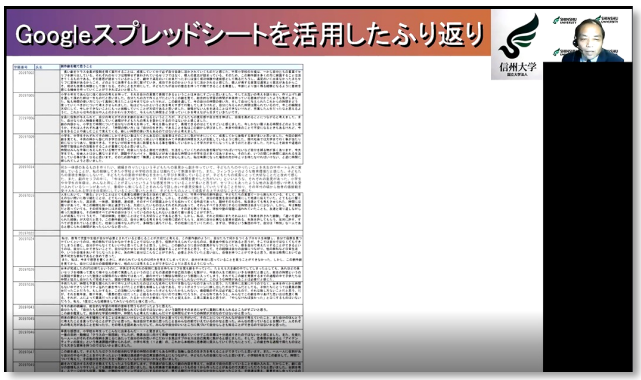
伏木 久始 氏の講演資料

㉔ 多様性を進めてこそ「個別最適な学び」が実現する。多様性を尊重した集団教育によって、個性が磨かれる。
㉕ 自律的な学びと活動を授業の中で広げていくことで、主体的・対話的で深い学びが結果として実現される。
㉖ 全国のへき地・小規模校のネットワークを作り、オンラインで実践交流していくことが求められる。
㉗ へき地・小規模校から未来の教育を発信していき、次世代のフロンティアとして高めることが重要なのだと思う。

シンポジウムを終えて ～ 池野敦氏・渥美伸彦氏・水上丈実氏・伏木久始氏、4人の講師による討論

① GIGAスクールになり、教育活動の傍観者は減って個別最適な学びも増えていくと思う。その中でもへき地・小規模校は様々な新しい取り組みを実践でき、実践方法の発信校になれるのではないか。
② へき地・小規模校の遠隔教育では中規模・大規模校などの他校とも繋がることができ、小規模校であっても何も遜色はなくなるのではないか。
③ カリキュラムマネジメントの点でも、小規模校は労力をかけずに、地域と一緒になったカリキュラムを作ることができる。地域から見ても、地域と一緒になってカリキュラムを作れる学校であれば応援したくなる。学校・地域一体型の学校を作る必要がある。
④ へき地・小規模・複式教育だからこそできる取り組みだけでなく、教科教育の新しいトレンドも含めてへき地校に取り入れる必要がある。実際に教科教育の新たな方法も取り入れやすい。
⑤ 学びの過程の可視性と俯瞰性と当事者性を捉えて、子供が自分で認識できるようにする必要がある。討論の文字化資料を作ることは時間がかかるが、やはり小規模校だからこそできる活動だと思う。

⑥ 自律性を目指す必要があるということは、4人の報告者の共通の課題になっている。しかし、まだ現場の先生が自律的な学びが弱いのではないかと思う。子供の様子を見て粘り強さはとらえているが、子供が自分を調整して自律していく指導をどうするかという点がこれからの課題になると思う。



伏木 久始氏による解説

⑦ 複式学年別指導において、主体的対話的で深い学びを進める場合に、10分とかの短い細切れの指導ではなく、時間を充分に与えて議論や活動を進めなければならない。そのために単元内のわたり・ずらしではなく、単元ごとのわたり・ずらしも大事な方法となる。

⑧ 大学でもGoogleクラスルームを使って、グループワークをやっている。Googleクラスルームをへき地校でも使えば、学校を越えてグループワークや討論できる。

⑨ Googleスプレッドシートを使えば、簡単なふり返りではなく、子供がじっくり考えたふり返りをすることができる。小学生でもじっくり考えたふり返りをして、教師はそのふり返りを捉えて指導できる。

⑩ コロナ禍を契機として、指示通りに動く子供から自分で考えて行動する子供を作ることができ、教えられることから自ら学ぶことができる子供を作れる状況となった。

各自発表後、４名の講師による討論会

⑪ ICTの活用で、対面型授業もオンライン授業とのハイブリッドにできる。また、一斉授業を個別最適化と集団学習のバランスのある授業に変えることができる。

⑫ 自律的に学ぶ取り組みは、本来はどこでもするべきことであるが、へき地・小規模校から取り組みを進めるのは、教職員の意識改革が進みやすく取り組みやすいからである。

⑬ へき地校では、GIGAがもたらすメリットを最大限生かす必要がある。へき地・複式校の授業について、大きく変わることが期待できる。

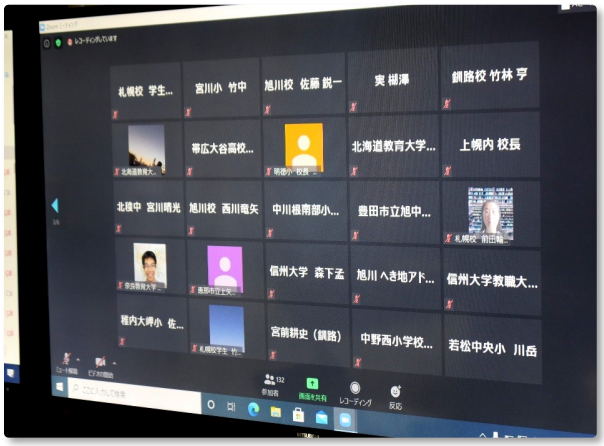
⑭ 地域との対話や教職員同士の対話の中で、協働的に取り組みを作ることが重要である。

⑮ 教育のこれまでの常識にこだわることなく、子供が主体的にできる学びの機会をいかに作るかが求められると思う。

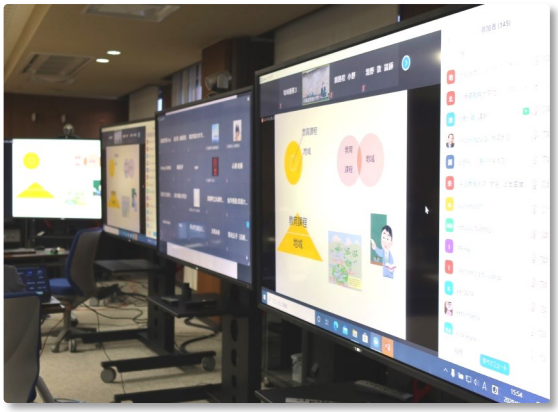
⑯ へき地・複式学校の総合的な学習が、自律的な学びを作る起爆剤になると思う。へき地校では子ども一人一人の学びの過程を捉えることができ、そこでの総合的な学習指導のイメージから各教科の授業を考えていく必要がある。

⑰ へき地校では将来の教育のために、何ができるかを考えていき、新しいしくみや考え方を今導入できるチャンスがある。未知のことに挑戦する教師の姿を見て、子供たちも新しいことに挑戦していくことになると思う。

⑱ へき地・小規模校だけではないのだが、へき地・小規模校はチーム学校を推進して変えやすいという点で、先進的になれる条件がある。そして新たな実践に取り組むことが、へき地校の先生方の実践力を向上させる条件となる。


たくさんの皆様に参加していただきました

第18回 へき地教育推進フォーラム全体の感想と展望



オンライン配信による講演の様子

4人のご発表では、へき地・小規模校だからこそできることを重視し、新しい発想で大胆に取り組めば教育改革の先進事例を作るパイオニアになれることを提起していました。また少人数で目が届きやすいので手をかけるのではなく、逆に自律的な活動ができやすい条件があることも指摘されていました。その大胆な転換の発想と方法を、学習活動や学級活動で取り入れやすいのがへき地・小規模校であるということです。

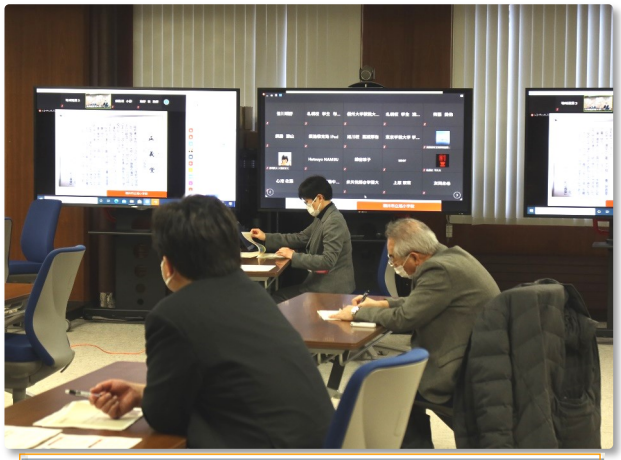
この新しい発想と実践方法を導入する条件として、へき地・小規模校では教職員がチームとなって発想を変えやすく、大胆なカリキュラムマネジメントを推進できることです。カリキュラムマネジメントは、内容・方法を学校と子供の状況に合わせて変えていくことが求められますが、4人のご報告はカリキュラムマネジメントを推進する提案でした。

池野先生のご報告では、地域・家庭と連携できる内容を地域に理解してもらいやすい言葉とコンセプトで説明できる力が教師に求められていますが、地域と一緒に教育課程を作るカリキュラムマネジメントが重要であることを指摘されました。また渥美先生・水上先生のご報告では、主体的対話的な学習活動を推進するために、子供が長期的な見通しを持って取り組めるよう、単元ごとのわたり・ずらしなどの大胆なカリキュラムマネジメントを推進できることを強調していました。伏木先生も、学校でも家庭でも子供自らが選択的・自律的に学習内容・方法を決めて取りかかり、相互の発達の違いに応じて自主的に取り組む試行錯誤の時間を応援することで、自律的な姿勢が身についていくことを強調されていました。これらは、いずれも新しい自律の発想に立ったカリキュラムマネジメントであると言えます。

またICTの活用は、へき地・小規模校のグループワークを活性化したり、場所、規模、校種を越えた交流活動やオンライン活動を進めることができます。また、遠方から教科の専門性を享受することができ、へき地・小規模校のこれまでの限界性を越える新しい段階に入ったことも共通の議論となりました。

4人のご報告では、今回の大きなテーマである「日本の未来の教育を創造する」ことにふさわしい新しい問題提起が為されていたように思います。このような問題提起をさらに多くの学校で実践しながら、またその普遍的な方法を選択・確立していくことがへき地教育に求められています。そのためにも、ますます全国と北海道内のネットワークを広げ情報交換を進めていきたいと思います。

ウェブ会議システムを利用して開催しました



オンラインフォーラムを開催する様子